

¡Hola, amigos!

第057号

(RとNの Cádiz からの手紙)

皆さんこんにちは。これはHPというより、日本の友人・知人の皆さんに私達の近況をお知らせする手紙のようなものです。そのつもりでお読みください。

更新は、なるべく毎週、日本時間の金曜朝05:00から07:00時に実施する予定です。臨時休刊の場合は前もってお知らせするつもりです。

なお、バック・ナンバーは最近三号分のみとし、それ以前のは順次削除します。

では、今週号へどうぞ。

2004年12月30日 カアディスにてR y N

☆今週号のトップヘジャンプ



今週号 No. 057(04年53週、05年01週) 12月30日 更新

「イルミナシオン」の巻

今年もいよいよ押し詰まりましたね。暖冬、暖冬と言っていた日本も少し冬らしくな
ってきているようですが、私達は過去二回の冬より寒いなと早くから感じています。
それがカアデイスへ引っ越したためなのかどうか？ TVにでる各地の気温を見る限
りマラガよりむしろ暖かい筈、なのに。 ニュースでは北の各州や内陸部の積雪の多
さをしきりに言っていますから、やはりこの寒さ、全国的なものかもしれません。

もしかすると1階(日本式に言えば2階)だったベナルマデナの部屋と10階(日本の
11階)の今度の部屋の高さの違いかとも思っています。もう一つははっきりしている
のは前の部屋は南東と南西に面した角部屋、今度のは南西向きで、「朝日のあたる家」
ではないという事。それにマラガより西で途中で山地が有りますから当然日の出も少
し遅いわけです。冬至が過ぎたばかりの今、8時半にならないと明るくなりません。

だから、朝起きた時、特に寒く感じるのだと思います。

寒いのが寒くないのと言うのは贅沢な話で、TVで報じられる世界各地の天災人災を見
るにつけ、今のこののどかさをツクツクありがたいと思います。多くの災害報道を見
る度に地球はユックリ終末に近づきつつあると思わずにはおれません。

陽が上がってしまえば、例によって陽射しは暑いほどです。日中の散歩では玄関を出
るときは重装備なのに、砂浜を歩いているうちに次々と着ているものを脱いで、しま
いにはTシャツ一枚になってしまうほど。

18時、水平線に日が沈むと同時に突如、突然、にわか、それまでの暖かさがウソ
のように温度は急速に下がってゆきます。気を付けないと風邪をひきそうです。

そして街にはクリスマスの電飾(iluminación イルミナシオン)が灯ります。



今ごろクリスマスのイルミネーションなんて、十日の菊じゃないか、とお思いでしょう？ それがここではそうでもないんです。こういうデコレーションはクリスマスのためだけではないらしく、クリスマスを過ぎても1月6日の公現祭まではそのままにしておかれます。

これはカアディス県議会の建物。こういうお堅い所も綺麗な電飾で飾られています。去年のベナルマデナのよりは一段と華やかです。ベナルマデナは外国人の比率が高いし、その大多数はカトリックではないので宗教行事に対するネツの入り方がやや低調なのでしょう。その点カアディスは住民の大部分はスペイン人で当然カトリック信者ですから宗教行事を祝う電飾がヨリ華やかなのも頷けます。

赤・白・緑のクリスマス・カラーのほか青を使ったものもありましたが、写真だと緑と青がイマイチ綺麗に出ません。周りの白色灯に負けてしまうみたいです。残念ながら実物の綺麗さは再現できてませんが、しばし旧市街の宵をイメージして下さい。





写真はいずれも旧市街のものです。馬蹄は日本でも縁起物ですがここでもそうなん

でしょうか？ 左の馬蹄の写真のバックにぼんやり見えるのは大聖堂の尖塔です。

星をあしらった新しい直線的図案あり、サンタや雪だるま・トナカイなどの伝統的な

図案もあり。

通りの名前ごとに同じ図柄を連ねているようですが、この通りはどういう図柄を使う

のか、誰が決めるんでしょうね。 日本なら各町内会などで希望を出しあってこの町

内はコレとか、毎年持ち回りとか、いろいろ調整するのでしょうか、果たしてその町

内会なるものが存在するのでしょうか・・・。私達のトコはありません。



旧市街は、街全体の外周を巡る海岸のバス通り以外、車一台がヤットという狭い道路ばかりなので、道路を横断するこれらの電飾の取り付け作業は比較的簡単でしょう。一方新市街のほうは殆どが対面2車線、メイン・ストリートは4車線と広く、こういう横断幕式の電飾はやりにくいので、街灯の電柱につけた小さいものが多いんです。



一番多く見られる図柄は、星、ベル、蝋燭などでしょうか、それと柊の葉。
星にも柊、ベルにも柊、蝋燭にも、そして、なぜか葡萄の房にも柊の葉。



上の連続6枚は最初の県議会の建物の窓飾りです。昼間見るとイカメしい建物ですが夜はこの通り、まるで昔懐かしいキャバレーかナイトクラブみたい。



いかかでしたか、クリスマスの買い物客で賑わう夜のカアディス旧市街散策の気分を
少しでも味わっていただけただけでしょうか？

ところでこの最後の右の写真の手前三つの図柄、これは東方の三博士(Reyes Magos)
を表しているのだと思いますが、これは明らかにクリスマスのものではなく、公現祭
即ち1月6日のためのものでしょう。

このことからこれらの電飾はクリスマスだけのためではなく、クリスマス・イブか
ら公現祭までの2週間全てをまとめて祝うものなのだと思います。

二年前初めてこの国のクリスマスを経験したときは、クリスマスが終わってからいつ
までも電飾の片付けをしないので、ずい分ブツたるんでるナー、と思ったモンですが
それは私達が知らなかつただけなんですね。

これらの写真を撮りにいったのはクリスマス直前の22日の事でしたが、夜8時を過
ぎても旧市街の狭い道は買い物客がごった返していて、雑踏の中で三脚を開いての撮
影は些か気が引けたものでした。

電飾の写真を撮っている私達を珍しそうに見る人が大勢居ましたが、中には写真を撮
る私達を撮っている人もいました！***

なお、今週からアップロード開始時間を1時間早めて、金曜日の日本時間朝04時か
ら07時と致します。この時間帯はまだ作業中で、あちこち不具合の訂正が出来てい
ない未完成のものと考えてください。

では、皆様良いお年を……。 ¡Feliz Año Nuevo! (フェリス・アニョ・ヌエボ)



最後に大掛かりなものを二箇所。これはやや地味な市庁舎の飾り。



旧市街への入口、プエルタ・ティエラ (Puerta Tierra)。幅がありすぎて全部はとも入りきりません。***

「ハポンの住む村」の巻

スペインにはハポン(Japón 日本)という姓を持つ人達が居る、という事は日本の新聞で紹介されたことがあるそうですね。旅行案内などにも簡単にでているのでご存知の方も多いと思います。セビージャ空港の下見をした後、この村に行ってみました。そこはセビージャ中心部から南南西へ直線で約12キロ、バスで約30分の所に有る
コリア・デル・リオ (Coria del Rio) という所です。

伊達政宗の命を受けて遙々海を渡った支倉常長の一行のうち、何人かは帰国せずスペインに留まって、その子孫がハポンという姓を受け継いでいるとか。そんな人達が現在約600人も居るのだそうです。

現在のハポン姓の人達に興味があったわけではなく、支倉一行が来た当時、そのままそこに居着こうと決めた人達が、なにを思ってそう決心したのか、それほど気を引かれるものがあったのか、その地に立って思いを馳せてみたかったのです。

この人達については何も特別な知識があるわけではなく、留まったのは数人というだけで、何故そうなったのか、それが3人なのか5人なのかさえ知りません。

もし、それが一人だけ「オレ残る」と言ったのなら話は簡単、多分、答えは女性でしょうネ。しかし、数人一緒にというのでは、もうチョット違う理由がありそうです。当時の日本では極めて少数派であった筈のクリスチャンとしての宗教的な悩みの故か？
旅の結果は決して成功とはいえないものだったらしいので帰りにくかったか？

又は長旅に疲れた末の仲間割れでもあったのか？

長距離バスセンターの案内所で聞いてみました。そのバスは近郊バス路線で、ここからではない、と別の乗り場を教えてくださいました。しかしコレがまた分かり難い話で、親切に教えてはくれるんですがドーニモ……。それでも大体の見当はついたので、まあ、行ってみよう。何処でも感ずることですが長距離バスと近郊バスと市内バス、これらのリンクがどうも旨くなされていない。というより夫々が別会社なので初めから利用者の便利のために旨くリンクさせよう、などと考えても居ない、ラシイ。



地図を見て下さい。町の外周を取り巻く環状道路の中心付近の三つの星、白が国鉄駅
サンタ・フスタ、赤がエスタシオン・デ・アウトブセス(長距離バス・センター)、そ
して緑はコリア行きのバス停の場所です。

右上隅が空港サン・パブロ、左下隅が今日の目的地 Coria del Rio(コリア・デル・
リオ)です。今、日本ではコリアものが流行りだそうですが、そのコリアはスペイン
語では Corea(コレア)、これは Coria、別物です。

教えられた付近をウロウロ。バス停はアチコチにあるものの、どうも私達の目的地と
は関係ないモノばかりらしい。その中でも多少望みがありそうな一つにオバサンが数
人居たので、コリアという所へ行きたいだけドー・・・。

オバサン同士でワーワー言いあった挙句、コレにのりなさい、このC3というバスで
いい、と自信タップリ。それにしては、結論が出るまでに時間がかかったわナー、と
コッチは半信半疑。このバス停には3路線が止まり、各路線の待ち時間が電光表示さ

れるという親切。日本では珍しくもないこの装置、スペインでは初めて見ました。

どうもセビージャでは初めて経験することばかり。

C3のバスはすぐ来ました。オバサン達は別の路線を待っているらしく立ち上がる気配ありません、オハナシの真っ最中。とにかくバスに乗ってドライバーに聞きました。いつもオバサンがやっているスタイルですが、私達は列の最後尾で遠慮がちに。

ヤッパリこのバスじゃなかったんだナー。ドライバー氏は前方を指差してソコの角を

左に曲がって百メートル、右手のバス停。極めて明快。グラシアス。

例のオバサン達はお互い同士の話に熱中でバスから下りてきた私達に気がつきもしません。ヤレヤレ聞いた相手が悪かった。2分後、ヤットの事でその近郊バスの停留所

にたどり着きました。マイッタ、マイッタ。

旅行案内などにはよく、何々の近くの、という記述がありますが、この「近くの」という表現の当てにならないコト。疲れていたり、重い荷物を持ったりでは百メートルでも遠いと感じるし、サア、歩くぞ、というときは5キロの道も遠くはありません。

一体、近い・遠いをどの位の規準で分けるのか。

「徒歩何分」というのが当てにならないことは不動産広告で毎度おなじみですが、近くの、というのはもっと当てになりません。どうして、何々から東へ何メートル、トカ言えないか。ランドマークからの方位・距離又は緯度・経度が位置を示す基本。

また、漠然と右へ左へと言うのも何を言ってるんだか分かりません。右へと言われたってそのときドッチを向いて言っているのか……。どうして駅の南口を背にして右とか、川に沿って下流へ何メートルとかいう風に言ってくれないのか、Nの方向感覚もこの右・左が主体で、そのせいか、Nは道に迷った夢を良く見るらしい。そりゃそ

一だろーぜ。頭が東西南北になっているRとは反対向きになっていることが多い。

バス停では10数人のオバサンがバスを待っていました。正午少し前のこの時間帯は

どうもオバサンの時間らしい。何処へ行ってもオバサンの群。

コリア行きのバスはすぐ来ました。バスを待つ間、一緒に待っている人達の顔つきをひそかに窺いましたが日本人の血を引いていそうな顔立ちの人は見当りません。

バスの中の賑やかな事。何しろ95%はオバサンです。静かにしろと言うのは無理な

注文でしょう。2輻連結のながーいバスいっぱいのおバサンの声・声・声！



市の中心からの直線距離では空港より少し遠いだけですが、空港方面は道中の殆どが自動車専用道、コリアへは一般道部分が多いので所要時間は国鉄駅から空港までの2倍、タツプリ30分はかかりました。でも料金は半分以下の1.1ユーロ。2倍も「乗れて」料金は半分以下。何度も言いますが空港が絡むと何でも高い。マラガ空港なんか、町では普通1ユーロのカーニャ(生ビール)が3ユーロ以上だもんね。さて、コリアの中心らしきところでいい加減に見当をつけて下りた所がドンピシャ、支倉常長の銅像があるというパルケ・カルロス・メサ(Parque Carlos Mesa)。公園は川沿いにある小さいもので、上の写真は公園脇の遊歩道。見た通り何にもない寂しいところで、ハセクラさんはブランコなどの児童遊具と同居でした。銅像の台座側面には、最近、記念碑や文化財などの被害が問題になっているあのペイント・スプレーの意味のない落書きがしてあり、ちょっとガッカリでした。あまりにもオロカ、無意味ないたずら。子供である筈はないのが余計悲しい。



ハセクラさんは東方、川に向かって立っていました。遙か東の日本をのぞむのか、遙々やって来た道中、又は再び川を下って出て行く長い航海を想うのか。温厚篤実という言葉がピッタリはまりそうな風貌です。銅像の台座は前面に支倉常長の銘板と、乗ってきたサン・ファン・パウティスタ(ばぷちすた)号のレリーフ、裏には日本からの航跡図があり、幸いにもこれらは心無い落書きから免れていました。

意外に思ったのは、言葉による説明が一切なされていなかった事。日本では殆どの場合、この像はどのような功績のあった人なのか、などを初め色々と故事来歴を掘り込んだ銘板をはめ込んであるのが普通ですね。

この像は宮城県が寄贈したものだという事は旅行案内に書いててありましたが、どうしてスペイン語の説明を添えなかったのでしょうか。





それにしても、帆船時代の人達の冒険心というか、未知の世界への探究心というか、そういうエネルギーは素晴らしい。今現在月へ行くよりずっと大きな賭けだったのではないでしょうか。計算され尽くした安全などないわけですからね。

ハセクラさんの顔を見て居残り組に対する第二・第三の疑問、帰りにくいとか、仲間割れでは？と考えたのは全く間違いだったと思いました。この人がそんなヤワなリーダーだった筈がありません。居残り組の数人は、やはり第一の宗教上の理由で、この国に残ったほうが幸せだと考えたのでしょう。一行が帰国した後、切支丹迫害の日々が続いたのですから居残った方が結果的に正解だった事になります。

その当時、この地が今より魅力的な土地だったとは到底思えません。今ではセビージャのベッド・タウン的性格を持った町になりつつあるようですが、別に風光明媚でもなく川沿いの平板な何の魅力も感じられない場所です。こういう所でも留まりたいと強く望むのは宗教の力でしかないだろうと思いました。

ハセクラさん本人も責任者でなかったら居残りたかったのかもしれない。本当は帰りたくなかったけれど与えられた使命や家族などに対する責任感からやむなく帰国の途に着いたのかも知れません。だから、居残りを希望した若く身軽な部下を無理に連れ帰ることもしなかったのではないかと。居残りたいという気持を良く理解していたのだと思います。その当人は帰国後不遇をかこつ事になったそうですから哀れです。

事の真相は全く知らぬまま、寂しい川沿いの遊歩道で勝手にそんな事を考えました。



コリア・デル・リオの街並み。磨り減った敷石道が古さを感じさせはしますが、特に取り立ててどうという魅力の感じられない街。



街を散歩していたら「理髪」という看板が眼に入りました。通りがかりに覗いたら中に居たのは典型的な「純西」セニョリータでした。ハポンの店か、又は「C」のか？



帰りのバスは中々来ませんでした。私達がバスを待っていた停留所の筋向いでは、三階建ての小さなビルの建築工事が進んでいました。写真の二人は左官屋のアニさん達で、外壁のモルタル塗りをしていました。私達がバス停に立っていると、初めに右の背の大きいほうが私達に気づき手を振ってきました。そして相棒の小さいほうの肩をつついて私達のほうを見てみると合図していました。

私達が手を振り返すと二人揃ってしきりに手を振っています。写真を撮るぞとカメラを構えると二人共うれしそうに肩を組んでポーズをとるんです。小さいほうはやや照れているようにも見えました。声が聞える距離ではありません。

そのときは、気のいいアニさん達だなーと思っただけでした。やがてバスが来て、もう一度お別れに手を振り乗り込みました。二人共壁を塗りながらチラチラとこちらを気にしていたのです。バスが走り出した途端アッと思いました。アノ二人、特に小さいほうはハポンだったのではないかと？ 最初に大きいほうが私達に気づいた時、仲のいい相棒のハポンに、オイ、見てみるバス停にオマエの親戚が居るぞ、とでも言っただんじやないか。だから、小さいほうは嬉しそうに手を振りながらもどこかしら照れくさそうだったのではないかと？ そうだ、きっとそうに違いない。私達がコリアで出会った唯一のハポンさんだったに違いありません。サヨウナラ、ハポンさん。***
